
私だけの空を

兎与鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私だけの空を

【Nコード】

N9622H

【作者名】

兎与鬼

【あらすじ】

「翼の無い天使。それが私の姿。飛べないツバサ。それが私の名前」。まばたきも出来ないほど衰弱した少女、ツバサは病室のベッドで毎日、真っ白の壁を見つめていた。だがツバサは知っていた。それは自分の本当の姿ではない。自分は天使。いつか、空を飛べるのだと。そんなある日、病室の扉が開く。いつもツバサを虐める看護婦の死体を土産に、美しい少年が現れた。「迎えにきたよ、ツバサ。行こう……もう一度、飛ぶんだ」…

翼の無い天使。それが私の姿。

飛べない翼。それが私の名前。

ガラスの羽根は脆いくせに重たくて、私を地面に縛りつける。

残酷にも、広すぎる空を見上げさせて。

私は祈る。

「誰か、私の背中を裂いて。

芽を出している、白い翼を引きずりだして……

そして一度でいい。この空に還らせて。 最期は翼が折れて、ま

た大地に縛られても構わない。

だからお願い。もう一度だけ……」

翼の無い天使。それが私の姿。

飛べない翼。それが私の名前。

飛べるのなら要らないと、両足を捨てた。

飛ぶためなら要らないと、両腕を捨てた。

歪な姿。飛べない翼……。

それでも私は、天使なのだ。

私を取り巻く世界、全てを否定してでも、
私はその事実を守り続ける……。

「暑いわね、今日も」

私のベッドに歩み寄った若い看護婦が、ため息混じりに呟いた。

「もう9月なのに。ここ、空調の調子が悪いのよ。残暑っていうのかしら」

看護婦は微妙な沈黙を要所に挟みつつ、ざっとそんな話題を転々、点々と口にした。

「あんたって大変よね。まばたきが出来ないんでしょう？ こんな壁も天井も真っ白な部屋で：秋の陽射しが目に沁みるでしょう？」

手にした注射器に透明な薬品を吸わせながら、看護婦は私に尋ねる。

私は何も答えない。

1日に何度も顔を合わせるこの看護婦に対し、私は今まで、一言も言葉を返したことが無い。

これからも、返すことは無いだろう。

看護婦も、それを知っていた。

それなのに、何故だろう。

彼女はこうして、私に質問を続ける。

垢抜けた茶髪や丁寧な化粧のされた可愛らしい顔によく合う、澄

んだ声で。

時折、静かな毒針を含んだセリフを交えて。

「……ねえ」

注射器を指で軽く弾きながら、看護婦は僅かに明るめた声で、私に呼びかける。

「あんた、自分で包帯替えてくれない？ けっこう鬱陶しいのよね、あの作業 あ、ダメだ。あなた、手が動かないもんね」

看護婦は、愛想笑いによく似た軽やかな笑声を零す。

「笑ってみせて？ ムリよね。まばたきも出来ないのに。じゃあ、反論してみて？ ……そっか、唇が動かないものね」

私は沈黙を続ける。

くすくすと笑いながら、私の腕にアルコールを塗る看護婦。

細い指が私の肌を抑え、渴いた痛みと共に、冷たい注射針が腕の中に沈んだ。

私は、この看護婦が好きではない。

彼女は私が好きだ。誰にも知られず、あまりに背徳的な気分を楽しめるオモチャとして、私を好んでいる。

彼女はこの後、髪型を成すみたく私の頭に巻かれた包帯を替え、病室を出て行く。

病室の扉を開けた瞬間、彼女はいつもの彼女に戻る。
私を振り返り、

「それじゃ、伊崎さん。また後で」

と言つて、優しく微笑む。

綺麗な笑顔を、仮面みたいに張り付けて。

私の名は、ツバサと言う。

16歳だ。

この病院に入ったのは四年前で、この病室は一年目だ。

私は閉じこめられている。まばたきも出来ずに、渴いた眼球の水分補給さえ、他人の手に任されている。

生暖かい水滴を私の目に与える小さな器具が、眼球を撫でても…
…痛みさえ、私は言葉に出来ない。

でも、私は知っている。

これは、私の本当の姿ではない。

私を取り巻く世界は、私にとって、本当の世界ではない。

私は知っている。

揺るぎない自らの真実と、世界のウソを。

私は、天使だ。

……ふと、

私の視界を闇が蝕む。

瞼が閉じてゆく……？

これは…まばたき？

まばたきだ。

珍しい。

今日は、自分でまばたきができる。

この前は確か、122日前の水曜日。

数えると…今日で、11回目。

縁起がいい…今日は、今日こそは……。

その時。

病室の扉が、静かに開かれる音を、私は聴覚の隅に聞いた。

私の首が…音を追って、動いた。

扉に視線を向ける。少年が佇んでいた。金髪で色白の……。

驚いた。なんて綺麗な人なんだろう。

それは秋の陽射しに金髪を淡く輝かせた、絶世の美少年だった。氷細工か彫像のような美貌にうつすら微笑みを浮かべている。

その笑顔は、まっすぐ、私に捧げられていた。

「久しぶりだね、ツバサ…」

少年は愛おしげに私の名と、再会の言葉を呟いた。優しくて、神

の唄みたいに耳を癒やす声だった。

そして、その手に持つものを煩わしげに床へ捨てる。

手に持つもの、持っていたもの……

私と少年が見つめ合う間、少年に髪を掴まれ、引きずられていた女性。

先ほどの看護婦だ。…恐らく、そのはずだ。

彼女は泣いている。小さな、言語とは言い難い奇妙な声で、仕切りに唸っている。

粟立つ、汚い声。

豚か山羊みたいな声だ。必死に喋ろうとする舌の無い生き物みたいだ。この人、泣いて……
……鳴いている？

看護婦の制服は、血と肉片にまみれてグシャグシャだった。

彼女の指が全て切断されているのは、すぐに分かった。

驚かされたのは、顔だ。

丸く見開いた眼…白目が滴る血に赤く染められても、じっと開き続ける眼。

瞼が無い。きれいに切り取られている。

口元も同じだ。歯が真っ赤に染まり、看護婦が声を出すたび、口の周囲は芋虫みたくなぐねぐねと変な動きをする。

唇も無い。ちぎられている。

床に転がった看護婦を、ふと少年は見下ろした。

「ツバサにヒドいこと言ったみたいだから、お仕置きしたよ。ゴ

メンね、勝手に」

少年は、私を知っている。親しげだ。
だが…私は、彼を……。

「あなた、誰？」

私は迷いながらも、はつきりと尋ねた。その声はどこか冷めていて…私は少し、後悔した。少年の顔は、さっと悲しげになったのだ。

私は繕うみたく、言葉が続ける。

「知らない……いえ…。思い出せないのね、私……。あんなに好きだった人の名前」

その言葉を聞いて、少し迷うと、少年は顔色を明るめた。

「僕はアイ。天使だよ」

涼しげな美貌を、子供みtainな屈託ない笑みに染めて、少年……
アイは言った。

天使。その言葉に、私はアイを見つめ直す。
彼は変わらぬ笑みに僅かな真剣味を添えて、まっすぐに私を見据える。

「ツバサを迎えに来たんだ。行こう……もう一度、飛ぶんだ。僕と、一緒に……」

……思えば私は、
この瞬間を何より待ち望んでいたのだ。

誰もが信じる世界の嘘と、私だけが知る自らの真実が、入れ替わる…この瞬間を。

私は、頭に巻かれた包帯を掴む。

嘘で私を縛る、煩わしい白の鎖をほどき、床に投げ捨てる。

私の長く艶やかな黒髪が現れた。

柔らかに揺れながら、私を本当の姿に戻す。

「綺麗だよ…ツバサ」

アイの甘い声を耳に、私はベッドを下りる。

「…さよなら」

床に転がる看護婦に、小さな挨拶を済ませると、私は扉を開けて待つアイの元に歩み寄る。

自分の足で歩き…自分の手で、扉を閉める……。

「驚いて、ブレーキも踏めなかったよ」

そう言うと、ある三十代の男は、牢屋の中で笑った。

運送会社に勤めていた彼は、四年前、解雇されると同時に鉄格子の向こうに閉じこめられた。

「ふつうに道を走ってたら、上から女の子が落ちてきたんだ。俺のトラックは空中で女の子にぶつかった。ブレーキを踏んだのはその時だ。人を跳ねたからじゃない。フロントガラスにヒビが入ったからだ」

男に悪びれる様子も無く、そう語った。それは彼が四年間、幾度と無く繰り返した言葉だった。そうして挑発的に、自嘲気味に、不快なセリフを吐く男は、あたかも非難を浴びる事で、自分でも理解しきれない不幸と罪悪感から救われようとしていたように思う。

「五年くらい前だね、あの子がおかしくなり始めたのは」

ある女学生は、学園の鞆を下ろしながら言った。

「背中が痛い、背中が痛い、って。どうしたの？ って聞いたら、羽根が背中を突き破ろうとしてる、だってさ」

彼女は大人ぶって、その不可解な話をさも平然と語った。

「あの子、病気なんだね。自分が空を飛べるって、信じてるんだ」

空を飛ばうとして車に跳ねられた天使を思い出し、彼女何か殺伐とした笑みを浮かべた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9622h/>

私だけの空を

2010年10月11日05時43分発行